



宇都宮の北、高原山(たかはらさん)の南麓に広がる栃木県矢板市は、鉄道や幹線道路が集中する陸の要衝にある。世界遺産で知られる日光や、那須塩原、鬼怒川温泉郷など、北関東有数の観光地へも近い。

東北自動車道・矢板インターを降りてすぐ、目に飛び込んだのが「天然日帰り温泉・貸山荘 矢板温泉まことの湯」という青い看板だ。矢印方向へ走ること約8分、素朴なつくりの湯どころに到着する。

「まことの湯」は、地下深くから汲み上げられた高温度のアルカリ性低張性高温泉で、掛け流しが自慢だ。露天風呂は広々としていて、身体が芯から温まり疲労回復にもよい。入浴料は一人500円と良心的で、スーパー銭湯とは違った趣がある。嬉しいのは湯あがり休憩用にしつらえた大広間の食事処で、つまみ程度のものから各種定食、千本松牧場のチーズケーキやアイスクリームまでそろい、カラオケも完備する。

3年ほど前から縁あって、この施設のコンサルティングをまかされた。まことの湯の山側には、コテージタイプの宿泊施設「ピラ矢板温泉」がある。緑に囲まれた可愛らしい山荘で大小さまざま、なかには最大30人が収容できる大型の棟や、シングルユース向けの客室も用意する。

ロングステイに最適

コテージはそれぞれにキッチンやリビング、和寝室、そして温泉が引ける内湯の

大人になっても合宿気分 ピラ矢板温泉 まことの湯

間取りで、電化製品や調理器具も揃う。インター近くとあって、大型スーパーやコンビニ、大手外食チェーン店、ガソリンスタンドも至近、便利なことこの上ない。私がライフワークに調査研究するロングステイ(長期滞在型観光)にも、適した環境が整っていた。

そこで、従来からの1泊朝食付き基本料金に加え、6泊7日の一棟貸しウィークリープラン料金を新たに設けてもらい、滞在型振興と季節利用の平準化を進めた。今では、宿泊湯治客や夏場の家族旅行、大学生の合宿や企業の研修旅行に利用するグループも増え、賑わいをみせている。

団塊世代の大量定年がスタートした2007年をさかいに、老後の余暇時間の過ごし方に注目が集まるようになった。田舎暮らしやクラインガルテン(滞在型市民農園)、自炊可能なリゾート宿泊施設でのロングステイなど、滞在のスタイルや目的、過ごし方も千差万別で多様性に富む。当時、雇用延長を望んだ層も本格定年を迎え、余暇活動はさらに活発化するだろう。マスツーリズム(大衆観光)を卒業して、個性を光らせ、暮らすように旅をする中高年層が増えている。

しかしその一方、若年層の旅行離れは深刻化している。私たち日本人の国民一人あたり国内宿泊観光旅行における平均宿泊数は、年間でわずか2.17泊(2011年度)と、先進国のなかではもっとも少ない。特に近年では、20代男女を中心とした若年層の下落幅が著しく、危機感が募る。

感性豊かな大学時代にこそ、旅を通じ



観光業界白門会の仲間たちとピラ矢板温泉で合宿気分、寢食をともにして一気に距離が縮まった。右列後方から2人目が筆者

てさまざまなことを感じとってほしい。安宿の連泊滞在もおすすめだ。暮らす目線で土地を知ることができる。たとえ貧乏旅行でも、旅人の泊数延伸がその土地に幾ばくかの潤いを与え、地域経済が活性化することは言うまでもない。

発端は南甲倶楽部

ちなみに、矢板温泉との出会いは、所属する南甲倶楽部(中央大学を卒業した経済人による交流団体)が発端だ。新宿・東五軒町で印刷業を営む島田和幸社長(商・1995年卒)から、会社の関連団体が施設を取得して間もないころに相談を持ちかけられたのである。以降、仕事とは別に仲間や家族でも利用している。大人になっても合宿気分、簡単な手料理と飲み物を持ち込んで、わいわい楽しく滞在できるのがよい。

機会があれば学生の皆さんも、ぜひ一度、ゼミやサークル、部活動などの合宿や旅行で矢板温泉を訪ねてみてほしい。連泊で、矢板を拠点に栃木路を、探訪するのもよいだろう。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。横浜商科大学・城西国際大学・東京成徳短期大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)など多数。